

# Gaskell の ‘The Poor Clare’

—超自然現象の实在を否定する小説—

中 村 祥 子

は じ め に

Elizabeth Gaskell の短編小説 ‘The Poor Clare’<sup>1</sup> (「聖クララ会修道女」) は最初、週刊雑誌 *Household Words*<sup>2</sup> にクリスマス用の読み物として1856年12月13日号から27日号までの3号にわたって連載された。その後短編小説集 *Round the Sofa*<sup>3</sup> (『ソファを囲んで』) (1859) に、5番目の作品として再録された。その時には Mrs. Dawson の sofa を囲む常連の一人であるイタリア人 Signor Sperano が、自分の話す番になった時披露する物語ということにされている。Signor Sperano は、或るイギリスの老司祭が遺した書類の束の中に「1747年12月12日」という日付のある大層古い文書を見つけ、それを sofa の回りの人達に読むことになっている。表題に使われている The Order of Poor Clares というのは、Assisi の貴族の娘 Clare によって、1212年に創始された聖クララ会(クララ女子修道会とも訳される。)のことで、厳しい清貧と観想を旨とすることで知られる女子修道会のことである。つまりこの ‘The Poor Clare’ は、一修道女をめぐる18世紀初頭の事件が描かれたものである。

‘The Poor Clare’ の物語の骨子は “Bridget というカトリック教徒の女性が発した呪いがその孫娘 Lucy にかかってしまい、Lucy は邪悪な double<sup>4</sup> (生き霊) に悩まされるが、最後に Bridget がベルギーにある聖クララ会修道院に入って自己犠牲の生涯を終える時、その呪いが解かれる” というものである。

Gaskell がこの時期にカトリック修道会を使ったこのような短編小説を書

いた背景については、これまでも様々に考察されてきた。

先ず A. W. Ward は「Manchester の [Gaskell の住居である] Plymouth Grove から歩いて15分以内の Levenshulme にイギリスの聖クララ会の修道院の一つがあったので、そういう事情が彼女にこの小説の最後のエピソードに使われている形態を思いつかせたのかもしれない」(p. xxii) と言っている。また Edgar Wright はこの小説で重要な場面の一つに使われている Lancashire の一地方は、「めったに人の行かない所……であるが、Gaskell にはよく知られた地域」(p. xv) であったこと、「イギリスにカトリック管区を再導入することをめぐって1850年代に論争が引き起こされたこと」(p. xvi) などが関係があったかもしれないと言っている。Lancashire が、魔女伝説や魔女迫害の多かった地域であったことはよく知られている。Jenny Uglow は、小説の最後に置かれている聖クララ会修道院の場面には、「Gaskell がベルギーへ旅行をした途上で聞いた話」(p. 399) が使われていると言っている。

これらに加えて多くの批評家が一致して認めているのは、‘The Poor Clare’ と Charlotte Brontë との関わりである。Gaskell は1855年に Charlotte の父親に娘の伝記を書くことを依頼されて、すぐにその準備にとりかかり、1857年に *The Life of Charlotte Brontë* を完成し出版した。‘The Poor Clare’ が構想され書き上げられた1855年から56年にかけては、ちょうど Gaskell がこの *The Life* のための資料を集め、執筆していた時期と重なっている。「*The Life* を書くための調査が、地方史と、荒涼とし孤立した田舎によって与えられる印象への彼女の関心に刺激を与え」(Wright, p. xvi), 作者に「Lancashire 北東部の the Trough of Bolland と呼ばれる地方」(p. 271) を舞台にし、過去に題材をとったこの短編小説を書かせる気にさせたと言えるかもしれない。

‘The Poor Clare’ と Charlotte Brontë の小説との関わりを指摘する論もある。たとえば ‘The Poor Clare’ の孫娘の名前が Lucy であること、Lucy の心理状態、及び Bridget がベルギーの町を彷徨う場面等には、Charlotte Brontë の小説 *Villette* のヒロイン Lucy Snowe の姿が投影されているとされる。<sup>5</sup> Felicia Bonaparte は Lucy が double の悪魔に苦しめられること自

## Gaskell の 'The Poor Clare'

体が、*Jane Eyre* に於て Jane が Bertha に悩まされること（「Gilbert と Gubar が気付いたことだが、勿論 Bertha は *Jane Eyre* の分身である。」(p. 50)）に匹敵すると言っている。

このように、一方で「'The Poor Clare' の直接の資料や、着想を与えたものについてははっきりしたことは何もわかっていない」(Wright, p. xv) とされつつも、執筆の背景をめぐる議論は概ね共通した認識を土台になされてきていると言える。

しかしこの作品が何を中心テーマとして描いているのかという点では批評家達の見解は大きく二つに分かれる。一般には「寛容と許しという道徳上宗教上の義務に反する激情が原因で起こる善悪の葛藤」(Wright, p. xvi)<sup>6</sup> を描いたもの、つまり憎しみを押さえ、敵をも許す忍耐と寛容の精神の重要性を描いたものとされている。これは 'The Poor Clare' が Bridget の罪と贖罪を描いた作品であるとし、Bridget を中心に見ていく見方である。

一方、「'The Poor Clare' のテーマはドッペルゲンガー・モチーフ<sup>7</sup> の一変種である」(Sharps, p. 252) とする読み方がある。これは Lucy が double の悪魔に取り憑かれることに焦点を当てて分析し、この作品を Lucy の物語であると見るものである。

以下の小論では、こうした 'The Poor Clare' 論の現状を踏まえ、果たして 'The Poor Clare' の中心テーマは何であるか、Gaskell の小説全体の中でこの 'The Poor Clare' という小品はどういう意味をもっているかという点を考えてみたい。

### 1. 中心テーマは何か

'The Poor Clare' は Lucy の恋人に当たる（そして多分 Lucy と結婚し、その Lucy も今は亡くなっている。）法律家（語り手）が、老年になって書き記したものという体裁をとっている。「1747年12月12日」という日付は、今や老人となったこの法律家が過去を振り返り、「かわいそうな Lucy に関わるあ

の不思議な物語」(p. 271) を、「事件が起った順に整理し直して」書き記している時点の日付である。従って事件そのものは更にそれから約30年程前に(1711年, 1718年等という年が出てくる。) 起ったものである。

こうして「話が誰にでもはっきりわかるように……事件が起った順に整理し直して」(p. 271) 書かれているにもかかわらず, 'The Poor Clare' は必ずしも小説としてまとまりの良いものとは言えない。一つには恐らくこれが一気に書き上げられたものでなかったことが影響しているのだろう。この小説は最初, 「1855年の夏に, Gaskell が *Household Words* のクリスマス特別号のために予定して書き始めていた」(Uglow, p. 399) ものだが, 「その年のクリスマスのためには書き終えることができず」(Sharps, p. 249n), 「翌年1856年に, 作者は既に『伝記』 [*The Life*] を実際に執筆中であったが」(Uglow, p. 399), Dickens の求めに応じて, 一年前に中断していたこの小説の「最後の部分」<sup>8</sup> を書き上げたのであった。つまり 'The Poor Clare' は最初の部分が書き始められてから完了するまで, 中断を挟んで一年以上かかったことになる。

またこれが三回に分けて(各号1章ずつ) 雑誌に連載されたことは最初に述べた。Tessa Brodetsky は, Gaskell の多くの短編小説が「当時の様々な定期刊行物に続きものとして連載されたこと」(p. 80) がしばしば「作品の構成の不十分さ」を引き起こしたと指摘し, 'The Poor Clare' もその弊害を被っているとしている。

この作品に同じパターンの人間関係が散見することも, 物語の筋を複雑にしているのかもしれない。たとえば Bridget の結婚の事情(召し使いだった彼女は, 地主階級の男だが性格の点では彼女より下の男と結婚する。) は, その娘の Mary の場合に酷似しているし, 語り手が旅先の Harrogate と Antwerp とで病気になり(後者の場合は負傷して), 宿の主人に世話になる部分も非常に類似している。その他 Bridget が関わる地主階級のカトリック教徒たちの特徴を描写する部分にも, 繰り返しのパターンとでも言えるものがある。

その他作者の不注意によると思われる前後不照応も幾つかある。<sup>9</sup>

しかし一番大きな不統一感を与える原因は, 結局作者が述べているのは

Bridget と Lucy とどちらの物語かという点での不明瞭さにある。先に触れたように、テーマを考える上で批評家の意見が二つに分かれるのも、このせいである。語り手は第1章の冒頭で「Lucy に関わるあの不思議な物語」を語ると（従って Lucy の物語ということになるだろう。）明言していながら、それ以降第1章では Bridget が呪いを発する顛末のみが語られる（しかも Bridget と Lucy との関係は一切明らかにされずに）。第2章では二人の関係が明らかになるが、この章の後半で初めて double の悪魔に取り憑かれた Lucy の様子が具体的に述べられる（従ってその部分は「Lucy に関わるあの不思議な物語」そのものになっている）。しかし第3章は再び Bridget の贖罪が語られ、Lucy は最初の短いパラグラフで描写されたあと、名前には言及されるものもはや登場することはない。小説の結末は唐突で、Bridget が、Lucy は呪いから解放されたと叫んで死ぬ瞬間で終わっている。従ってこのあと Lucy が悪霊に取り憑かれている状態から逃れて、語り手の法律家と結婚したはずの部分は、単に読者の想像にまかされているに過ぎない。<sup>10</sup>

しかしこうして見れば明らかのように、これは「Lucy の物語」ではなくて Bridget の物語である。作者は Bridget が何故呪いをかけたのか、その呪いはどのように働いたか、そしてその呪いはどのようにして解かれたかを描いているのである。従って表題も、Bridget のことを意味する 'The Poor Clare' になっている。Lucy は呪いが無垢な者に振りかかる場合の最も典型的な例として使われているのである。

しかし Bridget の物語であるからと言って、先に見たように、この作品を単純に忍耐と寛容の精神の重要性が Bridget の生涯を通して示された物語と見做すことはできない。これをそのように見る多くの批評家たちは、次のように考える。

“Bridget が敵に対する激しい怒りを押さえることをせず、口にした呪いが「悪魔を呼び出し」(p. 317), Lucy に取り憑いて彼女を苦しめた、しかし最後に Bridget の無私的行為によって Bridget の罪が許されるというストーリーに作者の伝えたい教訓がある。つまり Bridget の激情は「憎悪と復讐の

罪」(p. 324)として批判され、最後に Bridget は「汝の敵が飢えたら彼に食べ物を与えよ、彼の喉が渴いたら彼に飲み物を与えよ」<sup>11</sup> (p. 332) という自己を押さえる行為を文字通り実践した時許されたのである。”

しかしこう読むだけではこの小説は平凡な教訓を与えるものになってしまうだろう。たとえば Lucy が double に苦しめられることの意味が宙に浮いてしまう。つまり Bridget の罪が何故直接 Bridget を苦しめるのではなく、Lucy という他者を苦しめると作者は書いているのか。Lucy が自分の孫だとわかって Bridget 自身もひどく苦しめられるとしても、何故一旦 Lucy という無垢の者が苦しむことになるのか。

それに語り手自身も、初め「Lucy の物語」と認識していることや、実際 Lucy の物語であるかに見紛う程の、悪魔に取り憑かれた Lucy の描写(第2章のその部分は、第1章(=Bridget についての記述)と同分量である。)<sup>12</sup> は、これを単に忍耐と寛容を説くための、Bridget の罪と贖罪の物語として見るには違和感が残る。<sup>13</sup>

しかも、果して作中で Bridget は批判されるだけの罪を犯しているのだろうか。<sup>14</sup> 罪と断じるには、単に押さえるべき激情を押さえ切れなかったというより以上の明確な罪状が求められる。呪いを口にしたという点は、魔術を使ったという‘罪’を前提にしない限り、それ自体では罪とは言えない。と言うのも Gaskell はこの作品の他にも呪いを発する人物の登場する小説を幾つか書いているが、そのどれも、呪いを口にする者は呪いをかけられる者の犠牲者であって、呪いをかけられる者(この作品の場合は Lucy の父親 Mr. Gisborne に当る。)の方が先に相応の悪事をなしているのである。<sup>15</sup> Bridget の場合だけ自らの死をもって始めて償いうる程の重罪と描かれているとは考えにくい。それに最後の場面で敵の Mr. Gisborne が水とパンとを手の届かない所へ押しやってしまったという描写は、自らの飢えと渴きを犠牲にして敵を救うという Bridget の行為が役に立っていないことを示している。Mr. Gisborne の飢えを救ったのは実際は救助隊の人たちだったのだから。つまり Bridget の贖罪は不発で終わっているのである。それにそもそも、

何故 Bridget の激情が呪いをかけるという行為で表現されているのか。たとえば 'Crowley Castle' (1863) では Victorine の激情は邪魔者を毒殺するという行為で表現されている。

このように考えれば作者が Bridget に呪いをかけるという行為をさせていること自体に意味があることがわかる。つまり作者はこの小説で超自然な現象を正面から扱おうとしているのである。Bridget が呪うだけの根拠があって思わず口走ったことが「悪霊」(p. 310) 即ち「悪魔を呼び出す」(p. 317) という超自然現象について、そしてそれが「魔法の罪」(p. 320) とされることについて描こうとしているのである。作者がこの小説を18世紀初頭の物語と設定しているのも、それが魔女伝説が信じられ、魔女迫害の存在した最後の時期だからである。<sup>16</sup> Lucy の苦しみも「悪霊に取り憑かれる」という超自然現象に悩まされる者の苦しみである。

## 2. Bridget は何故 Mr. Gisborne に呪いをかけたのか

では何故 Bridget が呪いをかけたのかを少し詳しく見てみたい。

Bridget Fitzgerald はアイルランドのカトリック教徒だった。彼女は、Lancashire, Coldholme の地主 Mr. Starkey が結婚した相手 Miss Byrne の乳母であった。Mr. Starkey も「堅固なローマ・カトリック教徒」(p. 273) で、名誉革命では Jacobite としてアイルランドに渡り、そこで同じ政治的信条を持ち、カトリック教徒である若く美しい女性 Miss Byrne と出会い、結婚したのだった。「Bridget Fitzgerald は自分の短い結婚生活の時期を除いて、決して彼女の育て子のもとを離れなかった」(p. 275)。従って Bridget は Madame Starkey になった「奥方」について、St. Germain (そこへ James II が亡命していた。) や Antwerp で暮らし、Sir Starkey が妻子と共に密かに Lancashire の Starkey 荘園に戻って来た時、この主人一家と共に Coldholme へやって来たのだった。

ここまでの Bridget は、Gaskell の小説にしばしば登場する女主人に忠実

な乳母の役柄である。しかしそういう乳母たちと違う点は、Bridget にとっては「育て子」がすべてではなかったことである。確かに彼女は「育て子」に「一貫して献身的で忠実で」(p. 278), Madame Starkey が発疹チフスで死んだ時も、「Bridget は自分以外の他の誰にも奥方の看護をさせようとはしなかった」(p. 278) 程であった。が、この「育て子」以外に Bridget には一人娘 Mary という大切な存在があったのである。

この Mary Fitzgerald も、若い頃の母親に似て、<sup>17</sup> 美しい女性だった。母親と共に Lancashire の田舎にやって来たものの、若者らしく「幾らかの変化を求めたいと思い」(p. 277), 少女時代を過ごした活気ある大陸での生活に憧れた。それで「Madame Starkey は海外の或る立派な貴婦人に付く勤め口を Mary に得てやった」(p. 277)。その貴婦人は、やはり Lancashire のカトリック教徒の地主 Sir Philip Tempest (後に Mr. Starkey の一人息子 Mr. Patrick Byrne Starkey の後見人になる人) の親戚に当る女性で、de la Tour d'Auvergne 伯爵と結婚して、海外に居たのだった。Mary は初めのうちは母親の元へしばしば手紙を寄越した。しかし自分はもうすぐ或る紳士と結婚するが、その紳士の名前は母に楽しい驚きを与えるために秘密にしておくという手紙が届いたきり、Mary からの消息が絶えてしまった。「我が子のためなら喜んで自分の命でも投げ出したであろう」(p. 276) 程深く Mary を愛していた Bridget は、自分の主人の地主夫妻が相次いで病に倒れ、その一人息子も後見人に連れて行かれて「Bridget が一人残された」(p. 279) 時、Mary を探しに大陸にまで出掛けて行った。しかし見つけることができずに、再び Lancashire の、主人の遺してくれた小屋に戻って、空しく Mary を待ち続けた。心配と苦勞とで実際以上に年を取って見え、荒れるままにされた小屋に住む Bridget は、村人たちから魔女だと噂されるようになった。

そんな或る日、若い地主の後見人 Sir Philip Tempest と共に狩りに来ていた Mr. Gisborne という男が、不猟の腹立たしさからふとしたはずみで Bridget の飼っていた犬を射殺してしまった。この犬はもとは Mary のペットで、Mary が去って以降 Bridget がとても大事にしてきたものだった。そ



の時 Bridget はこの Mr. Gisborne に向って次のような呪いを発した。

「お前には、お前の最も愛する者で、お前を愛してくれる唯一の者が——そうだ、人間だ、しかし私のかわいそうな死んだいとしい生き物と同じように無垢で優しい人物で——お前には、そういう人物が、その者にとっては死んだ方がずっと幸せだろうが、皆にとって恐怖の的となり忌わしい者となるのを見せてやるぞ、この血のために。」(p. 283)

読者にはこの時点で（ちょうど第1章の終りに当る。）、不機嫌そうで残酷なことのできそうなこの Mr. Gisborne という男が、Mary の結婚すると言っていた男だと推測することができる。何故なら Mr. Gisborne は自分に呪いをかけたこの老婆が Bridget Fitzgerald という名前であると聞いて大変動揺するからである。

実際、物語が進むにつれて次のことが明らかになる。Mary は確かにこの Mr. Gisborne と結婚するはずだったこと、そして娘の Lucy が生まれたこと、しかしその直後に Mary は「Mr. Gisborne が彼女に或る恐ろしい詐欺行為を働いた……のを知った時、彼女は許そうとも耐えようともせず、……流れの早い川に身を投げて溺死した」(p. 308) こと、Mr. Gisborne は深く後悔し、「その母親の残酷な死」への思いからも娘 Lucy を大変愛していること、が。

こうして Bridget の呪いは Mr. Gisborne が今最も愛している者つまり Lucy にかかってしまうことになるのだが、作者はここで Bridget が知らずにしてしまったこととして、単に孫に呪いをかけてしまったということだけを描いているのではないことがわかる。先ず Mr. Gisborne が Bridget の目の前で Mary が以前飼っていた犬を「ほんの気まぐれのために」(p. 312) 射殺し、その犬が Bridget の腕の中で死んでいき、その犬の血が「一・二滴 Mr. Gisborne の狩猟服に迸った」(p. 283) ということは、Mr. Gisborne が Mary 自身をその犬のような目にあわせたということを Bridget の前に暴露しているわけである（勿論この時点では両者にそれとはわからずに）。従ってこの時 Bridget が直観的に Mr. Gisborne を「この邪悪な残酷な男」(p. 282) と呼

んだのは、この男の犬に対する以上に Mary の扱いに対して正しい表現だったのである。

Mr. Gisborne が Mary になした「邪悪なこと」とは、Gaskell は作中で明言していないが、勿論、Mr. Gisborne が結婚の約束をして Mary を誘き出し、Lucy が生まれたけれど、彼は Mary と正式には結婚していなかったということを意味している。Mary はその「恐ろしい詐欺行為」を発見した時自殺したのである。勿論 Lucy も Mr. Gisborne の私生子である。「私は Lucy が父の嫡子なのか庶子なのか知りません」(p. 299) と、Lucy のコンパニオン Mistress Clarke が言っているのも、つまり庶子だということである。また Lucy に魔物が憑いてからの Mr. Gisborne の冷たい態度や、「お前は正当な血縁ではない」(p. 303) という誹謗の仕方からも同じことが指摘できるだろう。

作者はこの点での Mr. Gisborne の責任に、次のような形で作中で何度も触れている。たとえば Bridget が Mary を探して大陸まで出掛けた時は次のように描写されている。

Mary は玉の輿に乗る結婚をしたという漠然とした噂が彼女の耳に届いた。……それで新しい名前になっているなら母は子に接近できないのかもしれない、たとえ娘のことを毎日耳にしている、彼女がその時名乗っている名称では、行方不明の子だと決してわからないから。(p. 292)

しかし Bridget はそれ以上それに該当する事実を発見することはできない。つまり Mary が「新しい名前」を名乗っている可能性はなかったのである。

また語り手の法律家が Mary の元の雇い主 de la Tour d'Auvergne 伯爵に（伯爵夫人は亡くなっていた。）問い合わせた時も、伯爵の返事は次のようなものだった。“伯爵夫人は Mary が付き合っている「或る身分の高いイギリス紳士」(p. 307) が「邪悪な意図」を持っていることを見抜き、Mary に注意をしたが、彼女は聞き入れず、「彼は間もなく彼女と結婚するのだと主張して……彼女は勤めをやめて、そのイギリス人と住むために去っていた。彼が本

当に彼女と結婚したのかどうかは、彼には言えない”と。つまり伯爵も、二人が正式に結婚したことを疑っているということである。

また Sir Philip Tempest は、「Mr. Gisborne はそういう事を充分やりそうな人物だ」(p. 307) とも表現している。

何故 Mr. Gisborne は Mary と正式に結婚しようとはしなかったのか。それは Gisborne は West Riding の地主で Skipford Hall の所有者で「高い身分」(p. 308) の男であったが、一方の Mary は「伯爵夫人に付添う美しい侍女」(p. 306) に過ぎなかったからである。実際には後に語り手が別の必要から調査した結果、Mary はアイルランドにある Kildoon の近くの Knock-Mahon の「Fitzgerald 家の莫大な財産」(p. 319) の相続人だったことが判明するのだが。

この正式に結婚しないで私生子を生んでしまったという恐ろしい罪（と Mary は考えたから自殺した。）を Mary に犯させた Gisborne に対して、Bridget は呪いをかけたことになるのである。この点は、多くの 'The Poor Clare' 論ではほとんど注目されないが、<sup>18</sup> 呪いが孫にかかってしまう不思議さ以上に重要な問題である。

語り手は後に、Bridget の呪いを「犬を殺された Coldholme の老魔女がかけた恐ろしい不可思議な呪い」(p. 309) だと表現した Mistress Clarke に対して次のように言っている。

「その男は Bridget のたった一人の子供を盗ったのです。……Bridget は、彼が彼女になした、[犬を殺す] より深い悪事のことを知らずに彼を呪ったのです。……その呪いの根っこは彼女が知っている以上に深い所にあります。彼女は物言わぬ獣を殺した罪よりもっと深い罪の責任に対して、知らずに彼を呪ったのです。」(p. 309)

これは小説の最後の方で Gisborne 自身が次のように認めていることと照応する。彼は初めから「自分が勝手気ままに Mary を扱ったこと」(p. 303) が不当なものであったことを認めていたのだが、更に「Bridget が彼と彼のも

のとにかくかけた呪いは、彼には神意を告げる宣告と見做せた。その呪いを発するようには彼女は至高の神によって突き動かされ、それは哀れな犬の死に対するよりも深い復讐を成就するように作用したのだ」(p. 319) と認めた。

つまりこの Bridget の呪いによって作者が言おうとしていることは、これが Gisborne の「邪悪な行為」に対する激しい非難になっているということである。<sup>19</sup> Bridget が呪う時に Gisborne を「私に害をなした者」(p. 282) と呼ぶ内実は、犬を殺されたことを指すのではなく、最後の場面で「彼は私の敵だ。終生そうだった」(p. 330) と叫ぶその内容の先取りだったのである。Bridget の呪いは事実関係を知らずに口にしたものではあったが、結果的に合理的な根拠のあるものだったのである。

### 3. Bridget は魔女ではない

このように作者は Bridget が呪いをかけた背景には理にかなった因果関係があったと描いているのだが、それだけでなく、これがいわゆる魔女の呪いとは異なることをも示そうとしている。

確かに Bridget は、Coldholme の魔女だという噂を引き起こす。彼女はアイルランドからやって来た余所者で、使い魔に当たる犬を飼っており、荒れた小屋に一人で住んでいる。「絶えずひとりごとを言う習慣」(p. 281) は村人には「彼女は何かの霊と交わりをもっている」と信じられる。彼女の今の容貌も魔女のイメージで描かれている。

彼女の歯は全部無くなっていた。それで鼻とあごがくっついていていた。灰色のまゆ毛は真っすぐで、彼女の深く窪んだ洞窟に似た目の上にほとんどたれ下がっていた。そしてふさふさした白髪が低い巾広い皺の寄った額に銀色のかたまりになってかぶさっていた。(p. 289)

つまり「彼女は無意識のうちに魔女だという恐ろしい評判を得つつあった」

(p. 281)。

しかし作者は他方で、実際には Bridget が決して魔女ではないということ周到に示している。Bridget がアイルランドからやって来た事情は縷々説明されていた。使い魔と見做され勝ちな犬も然るべく理由があって彼女のものになった普通の飼い犬に過ぎない。だからこそ Bridget もこの犬が病気になった時、彼女は「動物のあらゆる病気を直す技を持つことで知られた、もと馬丁をしていた男」(p. 281) (今なら獣医に当たる。)の所へ連れて行って直してもらったのである。何よりも Bridget の生活費そのものが、Sir Philip Tempest が彼女の亡くなった主人 Mr. Starkey に頼まれていて、「Fitzgerald という名の老女性に定期的に年金を払っている」(p. 288) ことによって、つまり現実的な手段によって成り立っている。

Bridget を「老魔女」(p. 284) と呼び、「彼女には水責めが必要だ」と無責任に口にする Starkey 家のもとの下男は、「家政婦としての Bridget の全盛期には再三解雇から救ってもらったならず者」であり、明らかに Bridget の方が人格が上である。また Coldholme の近くの牧師も彼女について「Coldholme の魔女だ!……魔女は火あぶりにされるべしというのがこの土地の掟だ」(p. 315) と叫ぶが、彼は「粗野で通俗的精神の持ち主で、事件の複雑な側面に時間をかけようとも注意を払おうともしない男」(pp. 314-315) である。

Bridget が常に告解をしてきたカトリックの Bernard 神父は、「魔法を使うという罪……この恐ろしい罪に於て Bridget Fitzgerald は有罪です」(p. 320) と宣言するが、ここで言われている「魔法を使う罪」というのは「呪いを口にした罪」のことである。当時は呪いの結果に関わりなく、人を呪うということ自体が魔術を使った罪とされていたのである。

またこの神父は、村人たちが Bridget は魔女の集会に出ていると思いついでいた時、実際は Bridget が告解できる場所が近くに無かったために、「嵐の荒れ狂う幾夜も、荒野を横切って、[彼の勤める Sherburne 家の礼拝堂へ] やって来て、告解をし、罪の許しを言い渡され、気持を宥められ柔らげられて、奥方のための日常の仕事へと戻って行ったものだ」(p. 321) という事実

を明かしている。

Bridget が自ら「私は恐ろしい罪において有罪です」(p. 322) と言っているのも、上述のように呪いを口にすることが魔法を使った罪とされていたからで、彼女が実際に魔術を使ったと言っているのではない。語り手が断定しているように、「Bridget は悪意に満ちた魔女というよりむしろ、荒々しい無作法な一女性である」(p. 311) に過ぎないと言える。

このように作者は何度も Bridget は魔女に大変似ているが、決して魔女ではないということを示している。つまり作者は Bridget の呪いを魔女の呪いに似せてはいるが、理性的に考えてそれは魔女の呪いではあり得ないということを確認に示しているのである。2. で見た呪いの内実の合理的な提示と同じく、呪いをかけるという行為自体も、一見魔女の使う魔術に見えるけれど、もともと Bridget は魔女ではないのだから、そういう超自然現象とは無関係だと作者は言っているのである。

#### 4. 極力排除されたミステリーの要素

呪いについて、魔女については以上見てきたように大変合理的に描写されている。しかしこの作品には確かに超自然現象が描かれている。それは Lucy に取り憑く double の悪魔が描かれているからである。従ってこの作品は常に Gaskell の超自然現象を描いた作品群の中に数えられてきたのである。<sup>20</sup>

Gaskell と超自然現象の関係については、「迷信深い時代の奇妙な習慣や、異様で気味悪い話はいつも Mrs. Gaskell を魅了した」(Chadwick, p. 87), 「確かに幽霊物語を語ることに彼女は非常に達者だった。余りに達者だったので、Charlotte Brontë を狼狽させた程だった」(Sharps, p. 249), 「Gaskell の長編小説ではどれも超自然現象は使われていないが、それは幾つかの短編小説のテーマになっている」(Brodetsky, pp. 80-81) 等々と、これが Gaskell の気に入りの題材だったとされている。

しかし Gaskell は、もともと超自然現象を描写すること自体を目的にした

小説を書いていない。小説に使う場合もあくまで fiction という前提でそうした現象を描いているだけである。つまり小説のテーマをより興味深く読者に提供するためにそういう要素を使っているに過ぎない。それに、エッセイ風の小品 'Disappearances' (「失踪」) (1851) で示しているように、彼女は初めから決して超自然な事柄を信じてはいないのである。<sup>21</sup>

実際、彼女の全作品の中で、超自然な現象がそれとして描かれているのは二作品しかない。<sup>22</sup> 一つは 'The Old Nurse's Story' (「乳母物語」以下 'ON Story' と略記) (1852) であり、もう一つがこの 'The Poor Clare' である。

そして 'The Poor Clare' はこの 'ON Story' を大変意識して作られている。どちらも語り手によって語られること、その語り手がどちらも大変実務的な人物に設定されていること、超自然現象をもっともらしく見せるために枝葉部分が特に鮮明に記述されていること等はこれまでもしばしば指摘されてきた点である。<sup>23</sup> 更に、作品の最後に格言を持ってきて、一種の教訓めいたものが与えられていることや、最後の場面で幻影からの解放が明らかになることも、両作品に共通していると言える。

しかしこれらの比較論は、どれもこの二作品の共通点に着眼するものである。ところがこの二作品は異なっている側面の方が重要である。先ず第一に二作品に於ては超自然現象の扱い方が異なっている。'ON Story' では明らかに作者はテーマを鮮明にし小説を興味深いものにするためにこの現象を使っている。次のように、超自然現象はあくまで物語を補強する素材として使われているのである。

そこでは母親と幼い娘の幽霊が出てくる。この幼い娘は地主 Furnivall 家の姉娘とその身分の低い夫との間に出来た子供であって、失恋した妹娘 Grace がライバルの姉の秘密の結婚を父親に密告したため、家柄に誇りを持つ父親に母と共に雪の日に追い出されて凍死したのである。それから何十年も経って、今や老年に達した Grace の元へ、語り手の乳母が幼い Rosamond (Furnivall 家の遠縁の子) を連れて住みに来た時、その Rosamond の姿を見て初めて、Grace はかつて自分のした行為の残酷さを悟るのである。凍死

した母と子の幽霊は、過去に Grace がしたことの残酷さを視覚化したものであり、遅すぎる後悔が現実の役に立たないことを示すための象徴でもある。作者はこの小説を通して、misalliance を許さない地主階級の意識は、自分の娘や孫であっても凍死させてしまう程残酷なものであると描いている。

従って 'ON Story' では先ず初めに不思議な現象が次々に起って、読者の興味を引きつけていき、十分に引きつけたところでようやく過去に遡ってどうしてそういう現象が起こるのかが明かされていくという構成になっている。つまり超自然現象の不可思議さが最大限活用されている。

ところが 'The Poor Clare' では逆で、それはむしろ意識的に避けられているのである。先にも触れたように、冒頭で語り手は「私が事件を知るようになった順ではなくて、それらが起った順に」(p. 271) 書いていくと断っている。「私が事件の中心人物たちと何らかの関わりを持ったり、彼らの存在について知ったりさえする前」の時期まで「私はずっと後戻りして書き始めねばならない」と。これは事件の因果関係がわかるようにわざわざ源まで遡って記述していくということを示す。ここでは 'ON Story' のようにいきなり結果から示される時の神秘的な効果が意図的に避けられていることがわかる。それで物語は Bridget がアイルランドから Lancashire にやって来た経緯から始まり、彼女が呪いをかけるまでが順に彼女の側で語られていくのである。

次いで数年後に、語り手の法律家がアイルランドの Kildoon の広大な Fitzgerald 家の財産の相続人を探していて Bridget の系図を調べている時、Lancashire から少し離れた Harrogate という保養地で、一人の若い女性 (Lucy) とそのコンパニオンとの不思議な二人連れに出会い、更に Lucy の double が出現するが、読者にはそれが Bridget の呪いの結果であるということがすぐに推測がつく。勿論この二人連れは自分達のことを即座に打ち明けたわけではなく、語り手も「このミステリーは何なのか」(p. 300) 知りたくて、「この宙ぶらりんの状態にはほとんど気が狂いそうになる」のだが、作者は 'ON Story' と違ってこの作品では読者にサスペンスを与えることを目的にしていないので、謎はすぐに解かれる（「Lucy は自分ですべてをあなたに



話すという恐ろしい危険を冒すつもりです。……明日午前10時にここへ来て下さい」。

そして Bridget の呪いがどういう形で Lucy に実現したかが、この時点で、半ばは既に読者の予測した通りだが、すっかり詳しく描かれていく ('ON Story' では父親と妹娘の残酷さを具体的に示す場面は小説の一番最後で明かされるのだが)。

つまり Mr. Gisborne は、Bridget に呪いをかけられたことを充分意識して、Lucy に対する真の愛情を決して口にせず、しかし実態としては Skipford の大きな屋敷で彼女を大切に育ててきた。しかし2年前の或る日、ワインのせいで舌のゆるんだ Gisborne はつい「地上のどんな生きものよりも、どんなに Lucy を深く愛しているか」(p. 303) を言ってしまった。Gisborne は直後に自分の言ったことに気付き、すぐに打ち消したけれど、もう呪いはかかってしまっていた。その翌朝から Lucy の double が出現し、その邪悪な生き霊が Lucy の意識と全く無関係に様々な邪悪な行為をし始めたのである。

このように 'The Poor Clare' の double はその出現自体には何の不思議も伴わないのである。<sup>24</sup> つまり超自然現象については、その出現の原因から先に述べておくことによって、その不可思議さが意図的に除去されていることがわかる。この小説には一方で Fitzgerald 家の財産の相続人を探すという事件が平行して描かれている。作者は初めからこの非常に現世的で形而下の事件を絡めておくことで、超自然現象についても、綿密な調査や理性的な推理を働かせることによって、その真相を明らかにしていくという手口が適用できると言っているのである。

## 5. Lucy の double

次に Lucy に取り憑く double について考えてみたい。この double は作中でどのように描写されているのだろうか。先ず Lucy は自分がこの double を見た場面を次のように言っている。

「向かい側にある大きな鏡に、私は自分の姿が見えました。そしてその真うしろにもう一つ、邪悪な恐ろしい自分の姿を見ました。それは余りに私に似ているので、私の魂が、鏡に映ったどちらの肉体の像に属するのかわからなくなつたかのように、私の身中で震えるように思えました。」(p. 304)

語り手が初めてそれを目にする場面でも同じである。

彼女のうしろにもう一つの姿が見えた——身の毛のよだつ程恐ろしい似姿で、似ている点では完璧だった。姿形や特徴や服の細部が似ることの可能な限り似ていた。しかしぞっとする悪魔の魂が灰色の目から見つめており、その目は嘲るようであり猥らでもあった。(pp. 304-305)

Bridget が目撃する場面では、次のように描かれている。

突然——目ばたきする間に——生きものが現われた、そこ、Lucy の後ろに。外見が似通っているという点については恐ろしい程 Lucy にそっくりだった。しかしそれは Bridget が跪いているのと正確に同じように跪き、Bridget が祈りへと深まっていく恍惚とした状態で指を組み合せた時、ふざけて真似をして自分の指を組み合せた。(p. 314)

このように Lucy の double は Lucy 自身について回り、その悍ましきで、友人や恋人を怯ませ、「そんな風に悪魔に付き纏われる人」(p. 317) から離れさせようとする。村の子供たちも Lucy の優しさにはひかれても、double を目撃すると「恐怖で真っ青になり、彼女の通り道から飛んで逃げた」(p. 318)。

それだけでなくその double は Lucy 本人から離れて別にも「奇妙な悪ふざけをして回る」(p. 295)。Lucy の父親 Mr. Gisborne が大切にしているオランダ球根の植わった花壇を踏み荒し、馬屋では馬丁たちと慣れ慣れしく話をし、不卑た笑い声を上げる。

作中では Lucy 本人については、「汚れのない気高い Lucy は闇の力の犠牲

者で」(p. 306), 「先祖の罪が子孫に報いる」一例だとされる。そして「恐らく悪魔は不道德な考えを仄めかしたり, 不道德な行為を唆したりしようとしてきたが, 彼女は聖者のような純潔さで, 邪悪な考えや行為に汚染されることなく過ごしてきている」(pp. 310-311) とされている。

こうした Lucy の double の方は何を意味しているのだろうか。多くの 'The Poor Clare' 論は, 'ON Story' の場合と同じように, これを単に超自然現象の一つとしてしか見ていない。<sup>25</sup>

しかし Lucy の double が示していることは, 先ず, 全く無垢な Lucy が邪悪な悪魔に悩まされるのだから, 呪いの実現という超自然現象が働く場合に, そこには何の法則性も因果関係も存在しないということである。これは特に魔女裁判で呪いが魔術として非難されたことに対する, 作者の見解を示している。Bridget の呪いが Lucy にかかったことは, Sharps の言うような「運命の皮肉」(p. 253) できえなく, 全く説明もつかず, 判断もできない, 従ってそこには何の摂理も働いてはいないということなのである。従って, 呪った本人にも, 何の責任も無いことなのだという作者の認識を示している。

Lucy の double について注意すべき第二の点は, それが通常の悪霊の現われ方とは異なることである。<sup>26</sup> この作品では Lucy の姿をした double が Lucy 自身に取り憑いたとされている。しかし普通は悪霊が或る人の似姿をとる double と, それに取り憑く無垢の人とは全く別の人物である。つまり誰か魔女とされた人物の幻影がその人物の double になり, 他の無垢の人々に取り憑くのである。'The Poor Clare' にも言及されている Salem の魔女裁判<sup>27</sup> はその典型で, 魔女とされた人々の double 即ち生き霊が, 数人の娘たち即ち無垢な人々に取り憑いて苦しめたと判定されたのである。

作中で「魔法をかけられ, 悪霊に取り憑かれた無垢な人々の事件」(p. 310) とか, 「邪悪な占有者が, その住みに来ていた肉体からわめき泣き叫んで追い出された例」(p. 311) とか, 「幻影を, それが出て来たもとの所へ送り返すやり方」と表現されている場合もすべて次のことを示す。つまり悪霊の持っている姿や「邪悪な占有者が住みに来ていた肉体」, 「幻影」等はすべて魔女と

される人々のことであり、それに「取り憑かれた無垢な人々」とは別人なのである。ここで語り手も、前者の悪霊=魔女=Bridget という前提で話している。「Bridget を水責めによるにせよ火責めによるにせよ試してみることは、私たちが救い出そうとしている Lucy の先祖を拷問する——それも死に至らしめるかもしれない——ことになるだろう、と私は言った」(p. 311), と。これが普通の double のとらえ方である。

従って 'The Poor Clare' で、普通はもし Lucy の姿をした double が出現したのなら、その生き霊のもとの Lucy 自身が魔女として非難されることになる。その意味では Mr. Gisborne の反応が本来の反応である。Lucy の double が呪いによるものであること、それは自分の罪への罰としてのものであると知っていて尚 Lucy 本人 (Lucy の double でなく) を「嫌悪し」(p. 319), Lucy を追放したのだから。

また逆に、作者が強調しているように、Lucy が「無垢な人」に当るなら、Lucy に取り憑く double は誰か魔女の double のはずである。この場合は恐らく「魔女 Bridget」(p. 324) の double ということになるだろう。

しかし作中で明らかのように、勿論 Lucy は魔女ではないし (従って Gisborne の反応は冷酷なものと批判されている。), 魔女という噂のある Bridget も (3. で見たように) 実際には魔女ではない。ということは、普通は double は、本人が魔女だからそういう悪霊が出現するのだと見做されて迫害されるけれど、実は全くの無垢の Lucy でさえ状況によっては悪霊がその double の姿をとりうるのであるということを示す。従って作者は、誰の double であろうと、それはその人物の本質とは無関係なのだと言おうとしているのである。その人物の double が出現したからといってその人物を魔女だと非難することは大変な誤りなのである。実際は Lucy のように無垢な人々かもしれないのだからである (後に作者はこの点に焦点を当てて、Lucy 同様無垢な人物なのに、その double が出現したからというので魔女だとされて処刑された Lois という少女を主人公にした小説 'Lois the Witch' (「魔女ロイス」) (1859) を書いている)。

このように作者は、通常の double の描き方を変更することによって、幻影を魔女の証拠に採用することの誤りを示そうとしているのである。

また Lucy が本人は全く無垢であるのに、彼女の責任でなく取り憑かれたもののために皆が怯み、彼女から「後込みする」(p. 309) という現象を通して、作者は本人の資質と関係のない側面でその人物を判断することの誤りをも示している。この場合はたとえば Lucy が私生子であるということへの世間の批判がそれに当たるであろう。Lucy はこのような「先祖の罪が子孫に報いた」(p. 306)「犠牲者」に過ぎず、本人には何の罪も責任もないこと、また Lucy 自身もそれらに影響されてはいないこと（「彼女はそのうろつく邪悪な妖怪によって汚染されることはない。」(p. 310)）が示されている。しかし現実には語り手も、最後の友であった Mistress Clarke も、後めたさを感じつつも、double つまり Lucy の本質とは関わりのない醜聞のせいで、「Lucy を置いて行きたい誘惑にかられる」(p. 318) のである。これも、Lucy の本質と Lucy にまつわる誹謗中傷とは、本来何の関わりもないはずだが、現実には非常に分ち難く結びついて、Lucy をひどく苦しめているということを示すものである。

## 6. この語り手は信頼できる人物か

ところでこの Lucy の double は、'ON Story' の幽霊の場合同様に、語り手自身にも目撃される。従って超自然現象について、3. で見たように、Bridget が魔女であるかのように見えるが実はそうではないという場合と違って、Lucy に憑く悪霊は実在するものとして描かれている。それでは 'The Poor Clare' は 'ON Story' のように超自然現象の実在を所与のものとして小説に取り込んでいると言えるのだろうか。次にこの点を考えてみたい。

作者はここで 'ON Story' と異なる更に二つのやり方を導入して、読者に超自然現象について考えさせていると言える。一つは、そもそもこの語り手の法律家の話が真実としてすべて信じられるものかどうかという疑問を常に

読者に抱かせていることである（もう一点は7.で後述）。「ON Story」の場合は、その語り手は直接読者に語っているのではなくて、今は母親になっている Rosamond の子供たちに向って（「今のあなたたちのお母さんですよ。」<sup>28</sup>）、Rosamond の小さい時の話をしている。従って読者は、子供たちに語っている乳母の姿も含めて一つの物語としてこれを見る。つまり語り手の乳母が既に fiction の登場人物である。幽霊の出てくる話はそういう一登場人物が語っている話である。勿論、乳母は実際に幽霊を見たのである。しかし読者は初めから彼女も含め一つの物語として読んでいるという暗黙の了解がある。

しかし「The Poor Clare」は語り手の法律家が直接読者に語っている。<sup>29</sup> 従って読者は常に語り手の話の内容を吟味しながら聞いていくことになる。4. で見たように事件の記述は起った順に語られているが、それは即ち呪いをかける者とかけられる者とを同時に描いていくことになるから、人間関係は結構ややこしい。heraldry（系譜記録法）を趣味とする語り手の伯父（やはり法律家で語り手の上司）が登場し、彼らは幾つもの問い合わせをしてようやく事実に通じ着く。そのすべての過程に読者は付き合わされる。読者は語り手の話に注意深く耳を傾けることになる。

ところがこの語り手はたびたび身体の不調を訴えている。そしてしばしば冷静な法律家らしからぬ程異様な高揚感に駆られるし、かなり神経過敏であるらしいこともわかる。ストーリーの展開とほとんど無関係に思われるこうした文章は、読者への情報提供者としての語り手の話を鵜呑みにするのではなく、距離を置いて見ることを、作者が読者に要求しているように思える。

たとえば語り手は自分のことを読者に紹介する時、London で一流の attorney として成功していた独身の老紳士である伯父の下で、年下のパートナーとして息子同様に扱われていた、と話したあと、次のように言っている。「私は働き過ぎだったのではないかと思う。とにかく1718年には、私はとても元気どころではなく、思いやりのある伯父は私のすぐれない顔付きのために心配してくれた」（p. 286）。一体この行は何を意味しているのだろうか。というのはこのことは物語の進展に何の関わりもないからである。

何故ならこの直後に彼は伯父に呼ばれて、或るアイルランドの法律家が伯父の元へ持ち込んだ事件（それが Fitzgerald 家の遺産相続をめぐる件だった。）の解決のために、アイルランドへ出向くように要請される。伯父がこの件にとっても興味を持ち、「若ければ伯父自らがアイルランドへ出掛ける」のだが、「年を取って痛風の彼は私に代理を命じたのである。」それは「その夜早馬で West Chester へ向けて出発し、……Dublin へ渡り、さらに Kildoon という名前の町へ進み」、そこで徹底的に調査をするという、かなり強行なものだった。しかし語り手は何の躊躇をすることもなくこれを引き受け、すぐ実行している。しかも語り手の身体の不調はこの調査に何の影響も与えていない。何故なら彼はアイルランドでとても精力的に働き、「今まで一度も他の法律家たちに発見されていなかった」(p 287) 或る重要な事実を「私はすぐに発見した」のだから。更にその実証のために「私はあちこち旅をし、私はフランスにも渡った」程だからである。

そのあとも（ややこしい問い合わせに手間どって一年以上経っていたが）、Bridget が Lancashire に住んでいることを突きとめた彼は、さっそくそこへも出掛けて行き、直接 Bridget に会った。その時（それは勿論まだ Lucy を知る前だったのだが）、彼は「更に探求してみようと、不思議で異様な風に刺激された。……まさにその朝何か不思議な力が私の意志を捉え、それが望む方向に私の意志を強引に押し進めるのを感じたからだ」(p. 292) と述べる。こうした異常な高揚感の表出も、冷静に見える語り手に対して違和感を与える。

またこの時「私はきつね火のようにいつまでも到達できない探求に、肉体的にも精神的にもどんなに疲弊を感じているかを伯父に伝えてあった」(p. 293)。心配した伯父は「ただちに私に Harrogate（ここが「18～19世紀には……神経の緊張にも効くとされていた」(*Book of British Towns*) ことは示唆的である——引用者)へ行くように言った。……そして仕事のことは暫くすっかり忘れるように、と命じた。」ここでも語り手は心身の不安定な状態を次のように表現している。

私は共有地で、じっと立っている力も、嵐のような強風に抵抗する力もなく、激しい風に吹かれていく一人の子供を見たことがある。私の精神状態に関して、私は幾分その子と同じような苦境に居た。私の目的に到着する機会のあるどの可能なコースをとっても、何か抵抗できないものが私の思考を駆り立てるように見えた。……私は病気になった。私は苦痛でひどく苦しんだが、それは私には実際的な救いだった。それは、病気になる前に私が絶えずなしていた理論倒れの探求の中にでなく、現実の苦痛に生きることを私に強いたから。

彼の衰弱が余りにひどくて、London から伯父が看病にやって来た程だった。

これらは単に、仕事熱心の余り、そして手がかりが得られそうでなかなか手に入らない焦燥感から、語り手は身体をこわしたと言っているだけであろうか。もっとも、語り手が身体をこわして Harrogate の保養地にやって来ていたことが、そこで Lucy とコンパニオンの Mistress Clarke に会うきっかけになった。が語り手は Fitzgerald 家の相続人を探して Bridget の所まで辿り着いていたのだから、いずれ Lucy たちと会うのも時間の問題になっていたのである。実際 Lucy 側が身の上話をするのと平行して、語り手側の調査も進展していく。<sup>30</sup>

その他、作者は語り手が一面理性的であると同時に非常に神経過敏である様子も示している。彼は Lucy の double の笑い声を初めて聞いた時「私は何故かはほとんど言えないのだが、それは言い表わしようのない程に私の神経にさわった」(p. 301) と表現する。これは彼が一方で、何か秘密があるのだと仄かす「Mistress Clarke の正気」の方をまだ疑っている時点のことである。

double を目撃したあとは「その非現実の妖怪 [double] 以外の何ものも、現実ではない」(p. 307) と彼は感じる。そして伯父に相談するために London に戻ると決めると「日の長くなった夏の日々を私は馬車に乗って行った。私は休んでいられなかった」(p. 310)。そして伯父の助言を得たあとすぐ、再び Coldholme へ戻っていく。このように彼は「まだ完全に強くなったとは言えない」(p. 294)、いわば大病からの回復期に、ほとんど休むことなく、Lancashire と London とを往復している。ここでも神経過敏と異様な高揚感が



感じられる。

更に、double に苦しめられる Lucy を見ていることができず再び London に戻った語り手は次のように描写される。「私は健康がすぐれなかった。そしてまるで脱け出せない悲惨な混乱状態の中にいるかのように感じた」(p. 319)。ここでも語り手の身体の不調は、単に Lucy を救えないことへの苛立ちからだけ来ているとは思えない。物語の始まった時点と同じ症状だからである。

次いで、孫娘に呪いをかけてしまったことを知った Bridget が Lancashire から姿を消したあと、その Bridget の消息を携えて Antwerp から伯父の事務所へ Bernard 神父がやって来る。その時の神父との会話の場面も次のように描写されている。

「私に説明して下さい」と私は言った「あなたは誰で、あなたはどのようにして Bridget と連絡をとるようになったのかを。何故彼女は Antwerp に居るのです？ どうか、あなた、もっと話して下さい。もし私が性急過ぎるのならお許し下さい。私は病気で熱があり、その結果、混乱していますので。」(p. 321)

そして現状に耐えられずに、伯父のパートナーとしての仕事を暫く休むことにした語り手を、作者は次のように描いている。

私は落ち着かず、惨めだった。……遂に私は旅に出る許しを伯父に求めた。そして私は一放浪者として出掛けた。他の多くの放浪者の場合以上にどんな明白な当ても無く——私自身から逃れるために。妙な衝動が私を Antwerp へ導いた。その頃 Low Countries では戦争と動乱が荒れ狂っていたけれど。或いは、多分、何か客観的に実在するものに関心をもつようになりたいという切望そのものが、その頃オーストリア人たちとの間で進行していたその闘争の真ただ中に私を導いたのだろう。(p. 325)

これは勿論、小説の最後の場面——Antwerp の聖クララ会修道院で Bridg-

et が敵のために自己を犠牲にして飢死することで罪を許される場面——を語り手が目撃するための布石である。しかし Antwerp に滞在中の語り手が、半ば自暴自棄の状態に描写されていることは注目に価する。「私の命は、まさにその頃、私にはとても遣る瀬ない重荷に思えた」(p. 328)。ここにはかつてややこしい Bridget の系図を調べ上げ、「私の性格や将来の見込みについて、どんな問い合せの質問にも答えてくれる人々」(p. 298) が自分にはいると述べていた、「法律家魂」(p. 308) に満ちた、自信たっぷりの語り手の面影は全く認められない。

このように作者はストーリーの進展とは全く無関係に、語り手を度々病気に陥らせ、熱のある状態に置き、異様な興奮状態に駆り立てる。彼は最初に、老人は事実を事実として述べるより、自分に引きつけて語り勝ちで、自分は特にその傾向が強いとも述べていた。作者は、そういう語り手に double を目撃する物語をさせているのである。つまり作者は 'ON Story' の場合と違って、語り手が実際に double を目撃したのかどうかをも含めて読者に判断させている。これは、double という超自然現象も、彼の「幻想」(p. 304) かもしれないということを示唆する。<sup>31</sup>

このように、語り手は決して「空想にふけることのない法律家」(Sharps, p. 249) として設定されているのではないという点は重要である。

## 7. 18世紀初頭には超自然現象はどう解釈されていたか

'The Poor Clare' に於ける超自然なもの存在の扱いについてもう一つ指摘すべき点は、魔女及び魔術について、作者は当時（作中時間の18世紀初頭）の様々な見方を提示していることである。

1) 語り手自身、最初、自分が double を目撃するまでは次のように考えている。

私はそれまで、魔術を使ったという事件は単なる迷信だとして無視して

## Gaskell の 'The Poor Clare'

きた。……これ [Lucy の件] も、魔法をかけられた者の話に見えるが、極端に世間から離れた生活が、感じやすい少女の神経に作用した結果に過ぎないのではないか？……誰か内科医が、幻影の实在を信じている者の誤りに気付かせてくれるだろう。(p. 304)

これは超自然現象についての理性的解釈を示しており、作者の執筆時点の一般の解釈（従って作者自身の考え）に通じるものである。また超自然現象を信じることの根拠の無さは、(既に3.で見たように)それが Bridget を魔女と考える村人たちの間違っただけに過ぎないことを通しても描かれている。

2) 宗教の宗派の違いによって魔女がどう考えられていたかも区別して描かれている。先ず Coldholme の近くの村の教区牧師(国教徒)は Bridget の名前を聞くと次のように叫ぶ。

「Coldholme の魔女だ！……あのもう一人のカトリック教徒の地主 Sir Philip Tempest が居なければ、ずっと前に私は彼女を水責めにしていただろう。……魔女は火あぶりにされるべしというのがこの土地の法律だ。そうだ、そして聖書の掟でもあるのですよ。……彼女をこの地方から退治するためなら私は自ら薪を運んで来るでしょう。」(p. 315)

これは「1736年まで魔女迫害法が廃止されなかった」(Wright, p. 451) という歴史的事実を踏まえて書かれており、当時の多くの教区牧師の考え方や態度を示しているのかもしれない。Gaskell は 'Lois the Witch' でも、魔女だとして水責めに遭った老女を助けるための何の手立ても講じなかった田舎の教区牧師を批判的に描いている。この 'The Poor Clare' でもこの狂信的な魔女迫害の牧師が批判的に描かれていることは、既に述べたように、明らかである。

勿論国教徒がすべて迫害に加担したのではなく、「英国国教会の一員」(p. 324) である語り手は、「私はこうした拷問や火あぶりについて聞くのに耐えられなかった」(p. 311) と反対している。

3) 一方、カトリックの Bernard 神父の考え方は次のように描かれている。

「私たちの邪悪な考えにすぐ気付こうとして、絶えず歩き回っている悪魔どもが居るのです、そしてもし彼らの主人がそれらに力を与えたら、それらをあらゆるさまな行動にもっていかうとしているのです。以上が、その罪つまり魔法を使うという罪の性質についての私の意見です。——何人かの懐疑論者たちは私たちに信じさせまいとしています、私はその罪を信じずにはられません。……この恐ろしい罪について、Beidget Fitzgerald は有罪なのです。」(p. 320)

(ここで「魔法を使うという罪」が「呪いを口にした罪」のことであるのは既述した通りである。)それではその罪を許されるためにはどうすればよいのか。彼は「彼女の恐ろしい罪を告解し、適切な苦行のあとで、赦免を得られるかもしれない」(P. 323)と言う。彼女はもう告解を済ませたので、

「あとは彼女がその致命的な罪の責任から自分を解放すること、その罪の結果から他の人々を解放することが残っています。どんな祈りも、ミサも役に立ちません……。絶えず苦行をし、常に他人のために奉仕することによって、彼女は遂に最後の赦免を獲得し、魂の休息を得るように行動しなければなりません。」(pp. 323-324)

そのために、Bridget は聖クララ会修道女になったのだと言っている。

4) それに対して「カトリック教徒を憎み嫌っている」(p. 320)、ピューリタンの伯父は、「彼の良き友 Sir Matthew Hale の意見によって理論武装していた」(p. 304)。Matthew Hale (1609-1676) というのは

英国コモン・ローの歴史上最も偉大な学者の一人で、清教徒革命 (1642-51) の間裁判の公平さを保ったことでよく知られる。彼はまた、仮議会 [1660年に国王の召集によらないで開かれた議会] の法改正提案と、Charles 2 世の王政復古を推進するのに重要な役割を果たした。……彼が後世の著述家たちから批判される一点は、彼が魔術を信じたことであつた。そして彼は魔女として告訴された二人の女性の処刑を許可したことが一度あつた。<sup>32</sup> (*New Encyclopædia Britannica*)

だから伯父も、「魔術を使ったという事件の实在」(p. 304)を信じていたのである。

また彼は次のように描写される。

伯父は何年も生きてきて、多くのことを学んでいた。……魔法をかけられ、Lucy のよりももっと恐ろしい悪霊に取り憑かれた無垢な人々の事件のことを聞いていた。……彼は祈りや長い断食によって、邪悪な占有者が、その住みに来ていた肉体からわめき泣き叫んで追い出された幾つかの例について語った。彼はそんなに昔ではない頃に起った、あの不思議な New England の事件について話した。或る一冊の本を書いた Mr. Defoe について話した。Defoe はその本で、幻影 [幽霊] に打ち勝ち、それが出て来たもとの所へ送り返す多くの方法を挙げているのだった。そして最後に伯父は、魔女に魔法を解かせる恐ろしい方法 [拷問や火あぶり] について、低い声で話した。(pp. 310-311)

そして「悪霊によって耐えがたく苦しめられている人のために……彼は祈りが役に立つと信じていた」(p. 319)。

ここで作者は、大變理性的で、系譜記録法を趣味にする程の伯父でも、国教会の牧師やカトリックの神父同様に魔女の实在を信じていること、彼らに魔法を解かせるには拷問や火あぶりが必要だと考えていること、1692年の Salem の魔女裁判が、「無垢な人々が悪霊に取り憑かれ、拷問によって魔法が解かれた」実例と考えていること、そしてそれらは Defoe を初めとして当時のピューリタンの考え方であったということを示している。

そして作者は、語り手自身は「英国国教会の一員であり」、「懷疑論者」<sup>33</sup>(p. 304)として、伯父とは意見が違うと彼に言わせている。

このように 'The Poor Clare' に於ては、18世紀初頭に魔女についてどのように考えられていたかが様々な角度から描かれている。そこには魔女や超自然現象の实在そのものを否定する考えも含めており、またそれらの实在を前提にした考え方にも互いに相違点や矛盾があることを示している (たとえば

祈りや拷問についての考え方など)。

作者はこれが18世紀初頭の物語であることが鮮明になるようにしている。まず最初に執筆時点が1747年と明示され、1711年、1718年という年以外にも、「18世紀初頭には」(p. 272)、「そんなに昔ではない頃 [1692年]」(p. 311)、「Jacobite のための政治的使命 [18世紀初頭を暗示する]」(p. 325) 等と書かれ、年代がいつかはっきり分かるようにされている。同じく過去に遡って語られる 'ON Story' が結局現代の話であるのとは、この点でも異っている。

従って 'The Poor Clare' は超自然現象を扱った作品群に分類されているが、作者の意識では歴史小説<sup>34</sup> なのである。18世紀初頭に超自然現象がどのように考えられていたか、それを時代の渦中に居た人物に語らせているのである。そして読者には現時点から見てそれらをどう判断すべきか考えさせていると言える。

ところで、伯父の考え方を示している箇所と言及されている Defoe の書物のことであるが、これは何を指しているのか。Wright は「ここで言われているのは Defoe の *A True Relation of the Apparition of Mrs. Veal* 『ヴィール夫人の幽霊』(1706) である」(p. 451) と解説し、一般にこれが認められているようである。しかしこれは明らかに間違いである。先ず *the Apparition* は「一冊の本」(p. 311) とは言えず、「パンフレット」<sup>35</sup> と言うべきものである。それに *the Apparition* は大変敬虔な Mrs. Veal が死ぬ時に友人の Mrs. Bargrave の所へ幽霊になって出てきた話であるが、同じ apparition でもはっきりと「a good Spirit」(*the Apparition*, p. 245) と書かれていて、'The Poor Clare' で問題にされている「evil spirits」(p. 310) とは違うのである。つまり Mrs. Veal は突然に死ぬので、幽霊になって友人に別れを告げ、信仰の大切さを述べ、自分の死後の、所持品などの処置を頼みに来ただけなのである。また *the Apparition* は創りものを前提としているが、記録文学と言える程物語をリアルに描いているという点で、しばしば小説誕生の先駆的作品とみられている。つまり、作中の超自然現象は、創作者の非常にリアルな空想の単なる一例に過ぎない。たまたま幽霊の物語になっただけなのである。従って超

自然現象の实在を認める伯父のせりふとして適切な引用例とは思えない。

筆者にはこれは *History of Devil*<sup>36</sup> (1726) か *A System of Magic*<sup>37</sup> (1728), 特に前者の本ではないかと思われる。しかしそうと断定できない理由の一つは、出版された年についてである。'The Poor Clare' の作中時間で伯父がこのせりふを話しているのはせいぜい1722年頃までであろう。そうなるとこの二つの本の出版年との間で矛盾が出てくる。もっとも伯父の年齢には先に触れたようにもともと大分巾があるので、ここでの本の出版年についての作者の認識のずれは許容範囲に入るかもしれない。

断定できないもう一つの理由は、「Defoe はその本で、幻影 [幽霊] に打ち勝ち、それが出て来たもとの所へ送り返す多くの方法を挙げている」(p. 311) と書かれているが、ここに挙げた二冊の本はどちらも、Gaskell のこの記述から連想されるいわゆる悪魔祓いの本ではないからである。*History of Devil* は上下2巻になっていて、上巻では先ず devil とはどのようなものかから始まり、彼が天国から追放され、神が新たに人間という種を造った時に神への憎悪と人間に対する妬みとで、人間を自分と同じ立場に陥れてやろうと作戦をたてる顛末が描かれる。そして Eve への接近に始まって今に至るまで、様々な形で人間世界に悲惨や苦難がもたらされてきたのだと語られる。下巻では主に、神の子がこの世にやって来てキリスト教の世の中になって以降が語られる。ここでは、devil は以前のやり方ができなくなって密使たち(それが魔女たちである)の使い方を変えるようになったこと、しかも最近では devil は更にやり方を変えて、魔女たちを使う必要すらなくなってきたこと、何故なら devil はもっと簡単に人間を獲得できるようになったから、ということ等が書かれている。つまり人間は、もし自らの心をよく観察してみて、そこに「怒り、妬み、復讐心、憎悪、激怒、紛争が漂っていたら、その人間は取り憑かれているのであり、Devil がその人物の中に入っているのだ」(p. 291) と。

このように、Defoe はこの本で自分は devil の歴史を書いていると言っているが、その姿勢は、devil は霊であるから人間の目には見えない (p. 26) とか、たとえば devil を見たという男の話は矛盾だらけで、それは決して devil

の幻影ではあり得ない (p. 41) とか、人間の魂に入りこめば、その人間が即ち悪魔の化身である (p. 164) と書いており、結果的に devil を超自然な存在として見ることを否定するものになっているのである。

*A System of Magic* では人間が今や devil と無関係になるまで墮した現象を描いているので、そこでは超自然現象は一層合理的に解釈されて (つまり事実上実在が否定されて) いる。

いずれにせよ Defoe のこれらの本では、彼が繰り返しこれは「歴史」であるとことわっているように、devil の跳梁を防ぐことに関しては、結局人間が devil を心の中に入り込ませないこと、そして我々がもはや devil の道具にはなり得ないとわからせる分別を持つことだ (p. 290) と結論づけているだけである。従って 'The Poor Clare' で示唆されているような devil の撃退法が書かれているわけではない。しかし Defoe は devil や魔女の実在を信じる立場で書いているので、<sup>38</sup> たとえば次のような箇所もある。

魔女や魔術師と呼ばれる者たちを裁判にかけて処罰する一連の模擬見せ物がある。つまり先ず或る女が魔女かどうかを知るためには、池に投げ込んでみよ。もし魔女なら彼女は泳ぐだろう……それから綱では魔女を吊るせない。柳の小枝つまり緑のコリヤナギの枝を手に入れねばならない。ドアの敷居に蹄鉄を釘で打ちつけると、魔女は家に入って来られないし、もし家の中に居れば出て行く。こういったことや、更に千ものやり方は余りに単純で信じられない位だが、保証され、当然と見做され、真実だと余りに広く受け取られているので、無神論者と見做されることなしにはそれらに抵抗することはとてもできない。(p. 252)

伯父が言及している「幻影に打ち勝ち、それが出て来たもとの所へ送り返す多くの方法」というのは恐らくこうした部分を指しているのだろう。それは伯父の蔵書について、「彼は美しい図書館を持っていたが、本はすべて過去の事柄を扱ったものだった」(p. 286) という記述にも合致している。いずれにせよ作者はここで、(Defoe のように) 当時のピューリタンたちが、客観的



に冷静に判断すれば、悪魔も魔女もその実在を証明できないのに、それらの存在を前提にしていたということを示している。そしてその是非の判定は、読者自身が下さねばならないと。

## お わ り に

'The Poor Clare' は作中で超自然な現象が実在するかのように描かれているので、これまで常に神秘的で非合理的なものを認める作品群の中に分類されてきたものである。しかし以上見てきたように、実際は逆に超自然な存在を否定するために書かれた小説と言える。

Brodetsky の言うように、小説はその素材に何を使っても許されるだろう。超自然現象があたかも実在するかのように書いてもそれは構わない。Gaskell は 'ON Story' では小説のテーマを鮮明にするために、地主階級が持つ特権意識の残虐さを視覚化して示す象徴として、そういう存在をうまく使った。

しかし 'The Poor Clare' では、一見 'ON Story' の幽霊の使い方と同じように見えるが、作者は周到に超自然現象の実在を否定しているのである。先ず Bridget は魔女ではない。無責任な人々の噂があるだけである。従って彼女の口にする呪いは、魔術としての呪いではあり得ない。それは本人には知らずに発せられたが、敵に対する当然の糾弾だった。相手の Gisborne は呪いをかけられた瞬間にそれを悟り、それを逃れようとするが、Mary を騙した罪を逃れることはできず、結局自分の最も愛する者が最も厭わしい者になるという罰を受ける。従って彼は、呪いは「神によって発せられた」(p. 319) (= 正当な) 復讐の予言だったととらえているのである。

このように、この小説の核になっているモラルは、一般に認められているような Bridget への非難ではなく、Mary に対する Gisborne の行為への非難である。作者はそれを一方で現実のレベルの物語として作り、他方でそれを、超自然現象を見る語り手の視点で語らせたのである。

Lucy の double は無垢な者が悪霊に取り憑かれたことを示しているが、それも通常の魔術による double の働きをするのではなく、悪魔が無垢な者を苦しめるといふ、超自然現象信仰が内部にはらむ矛盾を示すだけでなく、「Lucy の先祖の罪」(p. 306) (=両親が正式に結婚していないこと) への社会的な非難が、謂れなく理不尽に Lucy を苦めるといふことを視覚化したものでもある。しかもそれを double という形で見たと語る語り手を、読者は全面的に信用することはできないのである。

Gaskell はどうしてこのように複雑な構造の作品を書いたのだろうか。

作者は小説を書き始めた最初から、超自然な現象や目に見えない世界というものに対しては、一貫してその実在を否認している。それらの実在を信じてはいないのだけれども、しかし大変無防備でもある。恐らくそうした問題を正面に据えて考えたことはなかったと思う。その事を示す典型的な例が、最初期のペンネームの使い方である。彼女は全く無防備に Cotton Mather Mills, Esq. と署名している。Cotton Mather (1663-1728) は確かに著名な思想家であり宗教家だったかもしれないが、一方 Boston や Salem の魔女裁判では「目に見えない世界の驚異」<sup>39</sup> を主張し、魔女迫害に加担した人物でもある。Gaskell は Mather のこうした側面も承知した上でペンネームに使ったのではあるまい。

また 'ON Story' を書いた時点 (1852年) でも、超自然現象の認識は同じだったと思う。つまりそれらの実在は勿論信じてはいないが、それでも小説を興味深いものに仕上げるために時にはそれらを利用して構わないと考えている。

しかし1855年か56年の時点で、特に Cotton Mather が Salem の魔女裁判で果たした役割を確信して以降、この超自然現象に対する認識を変えたと思う。たとえ小説を興味深いものにするためであっても、それらの扱いは慎重でなければならないということである。これは、歴史の流れの必然性を呪いの実現として象徴的に表現した二つの小説 'Morton Hall' (1853) と 'The Doom of the Griffiths' (1858) に於ける、呪いの位置付けの違いを見てもよくわか

## Gaskell の 'The Poor Clare'

る。前者では作者は語り手を通して（ちなみにこの語り手が Bridget という名前であることは、'The Poor Clare' を執筆する時、作者がこの 'Morton Hall' をも念頭に置いていたことを示すであろう。）地主 Morton 家の衰退はピューリタンの Alice Carr の呪いのせいだと絶えず読者の注意を喚起する。一方後者の作品では9代目に呪いが実現するとむしろ非常に具体的な内容の呪いなのに、作品の焦点は父子の対立を描くことにあって、これが呪いの実現だという印象は非常に薄い。事件は8代目の時に起っても10代目の時に起ってもよさそうである。

'The Poor Clare' はこの変貌の過渡期に書かれている。この作品で作者は初めて Salem の魔女裁判に言及している。この時作者の念頭には当然 Cotton Mather と、彼がこの裁判で果たした役割のことがあったはずである。（そしてかつての自分のペンネームのことも。）ここでは先に見たように、語り手の伯父の友人として Matthew Hale の名が挙っているが、むしろ Cotton Mather の名を挙げた方が伯父とは年齢的に合致したと思われる。が、作者としては Cotton Mather 以外にもそういう人物が多くいたことを示したかったのかもしれない。作者は恐らくここで魔女の存在を信じた著名な、理性的と見られる人物の名前を誰か挙げたかったのである。

こうして 'The Poor Clare' では、超自然現象が、理性的に判断すれば矛盾だらけなのに、18世紀初頭までいかに安易に、それも理性的なはずの人々に信じられていたかを作者は具体的に描いたのである。そしてこの作品を通して、超自然現象の存在を信じるのがどんなに矛盾しているか、どんなに無垢の人を苦しめるかということを示し得た。

しかし作者は 'The Poor Clare' のように超自然現象の存在を間接的に否定するやり方では満足できなかったと思う。たとえ 'ON Story' や 'Morton Hall' と描写の仕方を違えても、double という超自然現象を目撃したと語る人物を語り手にしている以上、Matthew Hale や Cotton Mather らの考え方への対立としては弱いものにならざるを得ない。それで Gaskell は1859年に 'Lois the Witch' を書いた。そこでは Cotton Mather の言う「目に見えない

世界の驚異」を信じるのが、どういう残酷な結果をもたらしたかが、魔女とされた Lois の悲劇として三人称で（つまり作者が直接読者に語って）はっきりと描かれていく。つまり超自然現象の实在が正面から否定されている。そこでは全く無垢の少女 Lois が魔女に仕立て上げられる過程は、‘The Poor Clare’で Bridget が魔女にされていくのとよく似た軌跡をとって示されている（ということは Lois が魔女でないように、Bridget も魔女でないと作者は言っているのであるが）。

このように超自然現象についての扱いを小説に於て遂に清算した作者は、それ以降最後まで同じ姿勢を貫いている。‘The Poor Clare’はいわば、こうした作者の変遷のちょうど分水嶺に位置する作品であると言えよう。

## [註]

1. Elizabeth Gaskell, ‘The Poor Clare,’ *My Lady Ludlow and Other Stories*, The World’s Classics Ser. 以下引用文のページ数はこの版に拠る。尚、同一箇所からの引用は原則として初出の部分でページ数を示した。
2. 1850年から1859年まで Charles Dickens が編集した週刊文芸雑誌。Gaskell も創刊号から寄稿している。
3. 全部で6編の中・短編小説から成る。2巻本で、そのうち1巻を中編小説 ‘My Lady Ludlow’ が占めている。最後の短編 ‘The Half-Brothers’ のみ書き下ろしである。作者は6編を *Round the Sofa* に収めるに当って、‘My Lady Ludlow’ の語り手 Mrs. Dawson を囲むサロンで、皆が一篇ずつ話をするという構成にした。そしてそれを更に聞き手の一人 Miss Greatorex という少女が読者に伝えるという形式になっている。
4. これは魔女裁判で生き霊とされるもので、「魔女として告発された人達の霊」(Gragg, p. 51) だとされる。それは本人にそっくりな double (生き写し, 似姿) である。本文でも ‘another…self, so like me’ (p. 304) ‘resemblance’ (p. 304) ‘likeness’ (p. 305) ‘the same as to outward semblance’ (p. 314) 等と、そっくりであることが強調される。尚、double については本論5. で詳述した。
5. Uglow は更に、Lucy が Charlotte Brontë 同様アイルランド人である点に注目している (p. 399)。
6. Ward も「Bridget の不可思議な罪とその驚くべき罪滅ぼしとが、この悲劇的物

## Gaskell の 'The Poor Clare'

語の真のテーマである」(p. xxi) と言っているが、これが 'The Poor Clare' の一般的な読み方と言えよう。

7. ドッペルゲンガーも生き霊で、「同一人が同時に違った場所に現われたり、死の直前にその前触れとして本人の前に現われたりする」(小学館 *Random House, English-Japanese Dictionary*) ものである。従って 'The Poor Clare' の double の現われ方と似ていて、Gaskell もこの作品でドッペルゲンガーを書いているという錯覚を広く与えているが、実際には両者は別物である。ドッペルゲンガーは対本人自身の問題であるが、'The Poor Clare' で言われているのは魔術の結果現われた悪霊についてだからである。尚、この点についても、本論 5. で詳述した。
8. Sharps, p. 249. これが具体的にどの部分を指すのか、つまり前年にどこまで書かれていたのかは不明である。
9. 例えば Bridget の年金についての描写の不一致がある。第 1 章では Bridget が仕えていた主人 Mr. Starkey が亡くなる時、「彼女は或るまとまったお金をもらいたいのか、それとも少額の年金をもらいたいのか尋ねられ……或る額のお金の方を戴きたいとただちに答えた」(p. 278)。それで地主は彼女にかなりの額の遺産と小屋とを与えた、ということになっている。しかし第 2 章では「Sir Philip Tempest は……自分が [故 Starkey に頼まれて] Fitzgerald という名の老女性 [Bridget のこと] に定期的に年金を払っている」(p. 288) となっている。  
また語り手の伯父に当る人物の年齢にも矛盾がある。彼は初めの方ではかなり年をとっており、Sir Matthew Hale (1609-76) は「彼の良き友」(p. 304) であったと述べられている。とすると遅くとも彼は17世紀前半の生まれでなくてはならず、物語の時点 (1718年前後) で70歳は優に越えていることになるが、小説の後半では1720年頃に60歳とされている。
10. 従って第 1 章冒頭で語り手がこの物語を書き出す時点 (1747年) での Lucy との正確な関係は実は不明なままである。しかし 'poor Lucy' という表現や、Bridget が持っていた聖母像の絵は「今、私の手元にある」(p. 288) という表現等から、恐らくこのあと二人は結婚し、その Lucy も今は亡くなっていると考えられる。
11. Romans 12:20 より。尚、Wright は、この節の後半「そうすればあなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのだから」という部分に、この小説のテーマが関わりと指摘する (p. 452n)。
12. 第 1 章 (pp. 271-284, 全14ページ) はすべて Bridget についての記述であり、

第2章のうち両者に関わる部分 (pp. 285-292 と pp. 307-317) を除いた残り (pp. 293-306, 全14ページ) はすべて Lucy に関するものである。

13. この点でも 'The Old Nurse's Story' とは対照的である。'The Old Nurse's Story' では「若い時にしてしまった事は年を取っても決して取り返しがつくものではない」という、最後に与えられる格言が、小説全体の教訓になっている。
14. この点で Bonaparte は、Bridget が修道女になって Sister Magdalen と名乗ることにに関して、「彼女自身はわずかでも自分を Magdalen [更生した売春婦] と考えるようなことは何もしていない」(p. 52) と指摘している。この罪の内容の認識は全く的はずれであるが、作中で Bridget が非難されるべき罪を犯していないという点では興味深い指摘ではある。
15. Cf. 'Morton Hall' and 'The Doom of the Griffiths.'
16. 最後の魔女裁判があったのが1717年、魔女迫害法が廃止されたのが1736年である。
17. Bridget が若い頃美しい女性であったことは「Byrne 家の大変美しい召し使いの女性」(p. 287) と形容されていることからわかる。また語り手が初めて Bridget に会った時、彼女は既に年を取っていたが「彼女の立ち姿には、どこか立派な威厳のあるところがあった」(p. 288) と描写されている。
18. しかし私生子を生むということへの世間の非難の不当性は、作者が *Ruth* から *Wives and Daughters* に至る多くの長編小説や、幾つもの中・短編小説で一貫して描いてきた重要なテーマの一つで、'The Poor Clare' でもこの問題は大きなウェイトを占めているのである。
19. これはたとえば 'Morton Hall' で Alice Carr が Sir John にかけての呪いの背景 (John が Alice を裏切ったために Alice が怒った。) と通底するものがあり、作者の他の作品での呪いの捉え方と合致すると言える。
20. たとえば Ganz は "Tales of the Supernatural" の一つとしてこの作品を論じているが、これは一般的な分類の仕方を示している。  
尚、Ganz はそこで、"'The Old Nurse's Story' は「超自然現象の存在を完璧に受け入れて創作されている」(p. 212) が、'The Poor Clare' 以降の作では「超自然現象の扱い方」(p. 213) が変わってきている”と指摘している点では正しいが、'The Poor Clare' とそれ以降の作 ('The Doom of the Griffiths' と 'Lois the Witch') とを同列で論じているのは不正確である。
21. これは同時代の怪奇小説とは異なる点の一つである。'Disappearances' でも、以前なら神隠しとして不思議がられたような事件でも、現在は近代警察機構が

発展して、合理的に解決されていく様子が述べられている。

22. 他に、Ward は中断された幽霊物語として全集に二つ採録している。そのうちの一つには確かに、赤ん坊を抱いた若い母親の幽霊が出てくるが、もう一作は、この断片では何とも言えない。少なくとも超自然現象が出現する部分は描かれていない。

'Morton Hall' と 'The Doom of the Griffiths' は、呪いを口にする人物が描かれるが (そして呪い通りに事態は進むが)、それらは決して超自然現象として具体的に描かれるわけではない。

また 'Lois the Witch' は本論でも後述するように逆に超自然現象の实在を正面から否定するために書かれた作品である。

23. Cf. Sharps, p. 249.

24. この点で、'Morton Hall' に於ける呪いの実現が合理的解釈に基いて描かれていくのと同様である。'Morton Hall' では地主の衰退と商人の抬頭という歴史の必然が、呪いの実現として比喩的に描かれているに過ぎない。

25. 勿論この double をどう解釈するかでは様々な論がある。Lucy の隠れた願望の表出であるとする精神分析的解釈 (Bonaparte) や、祖母の呪いが孫にかかるところにギリシャ悲劇に通じる宿命が認められるとする解釈 (Sharps) などである。しかし作者が超自然現象の实在を前提として (勿論 fiction としてだが) この作品を書いていると解釈している点では同工異曲である。

26. ドッペルゲンガーと異なることは既に指摘した通りである。註7参照。

27. New England, Massachusetts の Salem で1692年に起った。若い娘たちが自分たちは悪魔に取り憑かれていると主張し、「Salem の三人の女性を魔女だと告訴した。これは当時の様々な不安な社会情勢の下でたちまち Salem を恐慌に陥らせ、最終的に数百人が逮捕され、多くが収監され、19人が絞首刑になった。……この狂気は10カ月経って、William Phips 総監が、'spectral evidence' を裁判で考慮すべき事柄からはずすように Boston の聖職者たちから請願されて、裁判を解散させた時、ようやく下火になった。」(*Encyclopedia Americana*)  
尚、この事件への Gaskell の関心は、'Lois the Witch' で結実した。

28. Elizabeth Gaskell, 'The Old Nurse's Story,' *Cousin Phillis and Other Tales*, The World's Classics Ser., p. 35.

29. 勿論、この話を Mrs. Dawson のサロンで披露する Signor Sperano の存在をもう一つ外枠として意識すれば、'ON Story' と同じ二重構造になるが、'The Poor Clare' が最初からそういう風に作られているのではないことは最初に見

た通りである。それに 'The Poor Clare' の場合は語り手が Signor Sperano に語ったのではなく、手記として客観的に存在するのであって、それを読み上げる者は仮に fiction 中の人物 Signor Sperano であっても、彼は単に読者の代理又は代表に過ぎないと言える。

30. 典型的な場面はたとえば次のような箇所に認められる。

「それは Skipford の Gisborne のことではないでしょうね?」と、私は答を予想して息もつけずに叫んだ。

「いいえ同じ人です」と彼女は言った……。 (p. 308)

31. Gaskell の小説を高く評価していた Henry James が、中編小説 *The Turn of the Screw* (1898) を書いていることは筆者には大変興味深い。両作品の analogy は、その気になって探せば幾つも見い出せるのである。先ず *The Turn of the Screw* の物語は、それが存在することを言い出した Douglas や、読者に語っている「私」を含め何人かの人々が「暖炉の回りに」集っていた時披露されたものであること、それは本当の語り手に当る家庭教師が手記の形で書き残していること（それを Douglas が「暖炉を囲む人々」に読むのである。）という形式面の酷似が指摘できる。内容的にも問題にされている亡霊が Gaskell の場合同様「悪霊」であること、その亡霊は見たと言っている語り手しか見えないこと等が指摘できる。また作中で聞き手たちは子供の前に亡霊が現われるという点にひどくこだわっているが、この点は 'ON Story' の 'the turn of the screw' かもしれない。実際、家庭教師と Flora との関わりには、乳母と Rosamond のそれが反映されているのを認めることができる。

しかしこれらの問題は Gaskell と James の比較論になるので、稿を改めて論じる。ここではただ、*The Turn of the Screw* について言われていること（特に、亡霊は語り手の家庭教師が見た幻覚かもしれないということ）は、'The Poor Clare' についても当てはめることができるという事を指摘しておきたい。

32. 尚、Matthew Hale の活躍期と作中時間の齟齬については、伯父の年齢に関連して別に述べる（本論のおわりに、及び註9参照）。
33. 別の箇所でも「私はあらゆる事を信用できなくなっていた」(p. 319) とあり、語り手は基本的にはカトリック、ピューリタン両者から非難される懐疑論者として設定されている。
34. 本論で言う意味の「歴史小説」というとらえ方ではないが、この作品が時代設定にこだわっている点を注目する批評家もいる。たとえば Sharps は、この作品が一方で1711年、1718年という年を掲げて書かれているのに、他方で、近い事



## Gaskell の 'The Poor Clare'

件はあったものの実際にはなかった Antwerp でのオーストリア軍との衝突が書かれていたりするので、これを「擬似歴史小説」(p. 253) と呼んでいる。

35. 「表題と序文と 9 ページの本文からなるパンフレット」(*The Fortunate Mistress* II, p. 320) である。
36. *Satan's Devices; or the Political History of the Devil: Ancient and Modern In Two Parts.*
37. *A System of Magic; or, a History of the Black Art.*
38. Defoe は Devil の存在を信じないことは God を信じないことだと、次のように言っている。

God と Devil という存在の存在を信じることについては、一方を否定する者は普通は両者を否定するし、一方を信じる者は必然的に両者を信じる。…… God が存在することを信じる者……のうち、Devil の存在を疑う者はほとんどいない、我々が事実上の無神論者と呼ぶ者以外には。(p. 18)

39. 1693年に出版された、Cotton Mather の著書の表題。*The Wonders of the Invisible World.*

## Works Cited

- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon.* Charlottesville and London: UP Virginia, 1992.
- Brodetsky, Tessa. *Elizabeth Gaskell.* Leamington Spa: Berg, 1986.
- Chadwick, Ellis H. *Mrs. Gaskell: Haunts, Homes, and Stories.* London: Sir Isaac Pitman & Sons, 1913.
- Defoe, Daniel. *Satan's Devices; or the Political History of the Devil: Ancient and Modern In Two Parts.* London, 1726, rpt. Philadelphia: Leary & Getz, 1854.
- . *A System of Magic; or, a History of the Black Art.* London, 1728, *The Novels and Miscellaneous Works of Daniel De Foe.* Vol. 12. London, 1840-41, rpt. New York: AMS Press, 1973.
- . "A True Relation of the Apparition of One Mrs. Veal, The Next Day after Her Death: to One Mrs. Bargrave at Canterbury. The 8th of September, 1705." *The Fortunate Mistress or A History of the Life.* Vol. 2. *The Shakespeare Head Edition of the Novels and Selected Writings of Daniel Defoe.* Oxford: Basil Blackwell, 1927.

- Dickerson, Vanessa D. *Victorian Ghosts in the Noontide: Women Writers and the Supernatural*. Columbia: Missouri UP, 1996.
- Gaskell, Elizabeth. "Disappearances." *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 2. London, 1906, rpt. New York: AMS Press, 1972.
- . "Lois the Witch." *Cousin Phillis and Other Tales*, The World's Classics. Oxford UP, 1987.
- . "The Old Nurse's Story." *Cousin Phillis and Other Tales*, The World's Classics. Oxford UP, 1987.
- . "The Poor Clare." *My Lady Ludlow and Other Stories*, The World's Classics. Oxford UP, 1989.
- Ganz, Margaret. *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict*. New York: Twayne, 1969.
- Gragg, Larry. *The Salem Witch Crisis*. New York: Praeger, 1992.
- James, Henry. *The Turn of the Screw*. 1898, The Modern Libray, 1957.
- Law, Graham. *Serializing Fiction in the Victorian Press*. Basingstoke and New York: Palgrave, 2000.
- Sharps, John Geoffrey. *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works*. Fontwell: Linden Press, 1970.
- Ugnow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.
- Ward, A. W. "Introduction to 'My Lady Ludlow,' ETC." *The Works of Mrs. Gaskell*. Vol. 5. London, 1906, rpt. New York: AMS Press, 1972.
- Wright, Edgar. "Introduction." *My Lady Ludlow and Other Stories*, The World's Classics. Oxford UP, 1989.

**Gaskell's 'The Poor Clare':  
A Work Denying the Existence  
of Supernatural Beings**

**NAKAMURA, Shoko**

Elizabeth Gaskell wrote 'The Poor Clare,' a short story, in 1856. This story deals with a ghastly double that possesses one of the characters. For this plain reason, the story has been indisputably classified as one of the author's tales of the supernatural. For example, the author may be using supernatural material that is acceptable in fiction, such as the apparition in her ghost story, 'The Old Nurse's Story' (1852). The double in 'The Poor Clare' may also be used to provoke interest in the story. However, it appears, on close scrutiny, that the converse is true. This treatise is an attempt to prove that the story was written in order to deny the reality of the supernatural, even though the double appears in the story.

The story may be outlined as follows. At the beginning of the eighteenth century, in a Lancashire village, an old Catholic woman called Bridget put a curse on a Mr. Gisborne who had killed her dog. She cursed him saying, "You shall see the creature you love best become a terror and loathing to all." The curse invokes an evil spirit on Mr. Gisborne's daughter Lucy (who afterwards turns out to be Bridget's granddaughter). Mr. Gisborne drives his daughter out of his house. All other people who love Lucy also run away from her, seeing the terrible double of Lucy appear behind her, though they are attracted by her gentleness and her beauty. Knowing that Lucy is suffering, Bridget is surprised, enters a convent, and leads a life of self-sacrifice. When she dies, the evil spirit disappears and Lucy is freed.

The author shows in several ways that it cannot be concluded that these phenomena are supernatural. First of all, Bridget is not a witch, though villagers call her one. They suspect that she uses witchcraft, and

feel weird because she is a stranger in Lancashire, lives by herself in a bleak hut, looks old, and always mumbles to herself. However, the author is as cautious as can be in clarifying Bridget's purpose in coming to Lancashire. In Ireland, Bridget was a nurse to a lady who was married to a landlord in Lancashire, and she also followed her foster child as a housekeeper. After both her lord and her lady died, Bridget has been left alone.

Bridget deeply loved Mary, her only child. Mary was bored, however, with living in the country, and went to the Continent and was lost there. Bridget's anxiety for her child's safety was enormous. While waiting for her daughter's return, Bridget devotes herself to caring for Mary's dog, which Mary left behind. It is the dog that Mr. Gisborne whimsically shoots with a gun to death. Bridget gets so angry that she curses him with intense words of blame. It shows how angry she is, and that her reasons to blame him are real, not supernatural.

Besides, Mr. Gisborne turns out to be the man that met Mary on the Continent and took advantage of her under the false pretense of an offer of marriage. Mary had a child named Lucy. However, when she knew that they had not gotten formally married, and that therefore Lucy was an illegitimate child, she drowned herself in the river. So, the significance of Bridget's curse was twofold. It blamed Mr. Gisborne for the death of the dog, and for his deceit that had led to her daughter's death. The nature of Bridget's curse had nothing to do with witches or witchcraft.

The movements of the double that possesses Lucy are quite realistic. However, they do not suggest that the author intended for the double to represent the supernatural. Actually, 'The Poor Clare' is fiction narrated by a young lawyer who is Lucy's lover. The author makes a tricky contrivance here. The narrator is very nervous and often becomes ill with a fever. His condition is sometimes critical. He is weary of life and the world, and finally takes time off work and starts on a wandering journey. Because of his situation and physical condition, this narrator cannot always be trusted by the readers. The supernatural being of the double might be just an illusion that the narrator witnessed in a fever.

Moreover, the double of an evil spirit with the power to possess

others is the work of a witch and not that of an innocent girl. Contrarily, in the story, pure Lucy is tormented by the apparition of herself, even though her characteristics are not common to those of the evil spirit. It can be construed into the following meaning; that is, the author may have intended to contradict the reality of the evil spirit's appearance, and so reject the generally accepted belief in the supernatural by her portrayal of the evil spirit. The double is nothing more than a visible symbol of social contempt for the illegitimate child. In fact, it is Mr. Gisborne, Lucy's father, that is to blame. However, the characters in the story unjustly blame Lucy, which tortures her all the more. This misplaced blame is also severely criticized by the author.

Thus, Gaskell uses supernatural elements to show that the reality of the invisible world is very doubtful, or rather deniable. She did not write this story on the premise that there is such a world, though many critics have assumed that she did. It would appear that such an interpretation is wrong because it assumes that the double of Lucy is merely a fictitious device used to amuse the reader, whereas, in fact, it represents socially unjustified criticism.

Two years after 'The Poor Clare,' Gaskell wrote 'Lois the Witch,' a tragedy of witch-hunting in Salem. In this story, the author clearly indicates that belief in the reality of the supernatural is erroneous. 'The Poor Clare' is a forerunner to 'Lois the Witch.'